

人文科学研究院附属  
言語運用総合研究センター

## スタッフの紹介

### 蛭沼 芽衣 (助教)

専門分野は日本語研究史です。特に悉曇学という分野において、日本語がどのように研究されてきたのかをみています。悉曇学とは、古代インドの言葉であるサンスクリットについての学問です。平安時代に、密教といっしょに中国より渡来し、のちに国学や日本語学にも影響を与えます。古代の日本人は、サンスクリットの研究を通じて、ことばをどのように捉えてきたのかということを研究しています。

### 増田 正彦 (学術研究員)

専門分野は音韻論・音声学で、特に中国語を対象として、声調やそれに関連する現象などを研究しています。中国語の声調は、音の高さに関わるという点で日本語のアクセントと似ていますが、各音節に平調や上昇調、下降調などということが指定されているという点が異なります。言語聴覚士や日本語教師の養成課程で音声学や言語学などの授業を受け持つこともしています。

### 山本 将司 (テクニカルスタッフ)

現在、人文科学研究院にテクニカルスタッフとして所属しています。専門は統語論、特に疑問詞疑問文に注目して通言語的性質を研究しています。疑問詞疑問文とはいわゆる「5W1H」を用いた疑問文のことです。そして、言語を用いたコミュニケーションの中で大きな役割を果たす文形式でもあります。ところが疑問詞疑問文は意外と言語間差異が大きく、そのような違いを英語、ドイツ語、イタリア語などで対照する研究を行っています。

## 2023年度のセミナー

※詳細は言総研のホームページをご覧ください。

### 国語セミナー

- 開催日 2023年11月18日(土)
- 講師 下地 理則先生(九州大学)
- テーマ 「僕らはみんな生きている」の「僕ら」って誰のこと？  
—琉球語を通して見る世界—

### 日本語教師セミナー(予定)

- 開催日 2024年3月2日(土)
- 講師 義永 美央子先生(大阪大学)
- テーマ 日本語教育における  
自律学習支援の理論と実践

### 言語聴覚士セミナー(予定)

- 開催日 2024年3月9日(土)
- 講師 宮本 昌子先生(筑波大学)
- テーマ 早口言語症(クラタリング)の理解と支援

## Center for the Study of Language Performance

発行日 令和6年 1月 26日 発行者 静永 健  
編集発行 九州大学大学院人文科学研究院附属 言語運用総合研究センター  
〒819-0395 福岡市西区元岡744 [TEL・FAX] 092-802-5104 [URL] <https://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/~cslp/>  
印刷 城島印刷株式会社  
〒810-0012 福岡市中央区白金2-9-6 [TEL] 092-531-7102 [FAX] 092-524-4411

## 言総研ってなに?

九州大学大学院人文科学研究院附属言語運用総合研究センターのことです。「ことば」に携わる方々と大学とをつなぐ架け橋になることを目指しており、現在、主に次の3種類の職業を意識して講演会やセミナーのテーマを設定しています。

- 言語聴覚士 ● 中学・高校等の国語科の教員 ● 日本語教師



## 大学の研究を教育・医療の現場へ

# 言総研通信

Vol.4





## 言総研20周年を迎えて

文学部の学問の多くは、先人の残したことばをひもとき、新たに調査を行ない、さまざまなことを合わせて考察をした結果を、現代のひとびとに向けてことばで伝えるということを行なっています。その意味で、人文科学研究院に所属する教員の多くは、ことばに関わる研究に長年の間従事していますので、何らかの社会貢献が可能であるとすれば、それは、「ことば」をキーワードにしたものになるだろうと思っています。言語の運用、つまり、人間がどのように言語を使っているのかということを経験的に研究していくのが、この言語運用総合研究センター(以下、言総研)の目的です。

言総研は、「ことば」に携わる方々と大学をつなぐ架け橋になることを目指しており、現在、主に次の3種類の職業を意識して講演会やセミナーのテーマを設定しています。

- 言語聴覚士
- 中学・高校等の国語科の教員
- 日本語教師

言語聴覚士(Speech Therapist, ST)とは、言語をうまく習得できない子供たちや、脳出血などが原因で失語症になってしまった人たちのために働いている方々です。人文科学研究院の教員が臨床の現場に出て行くことはなかなかできませんが、言語聴覚士の方々と学術面でサポートすることによって、結果として社会貢献につながっていくような方向で言総研の事業を展開したいと考えています。

国語教育に携わっている方々は、日本語を気軽に使ってしまう学生たちに、より深く広い見地から言語の重要性や奥深さを伝えようと、日々いろいろな工夫をされていると思います。言総研では、日本の古典語法・漢文・方言等、それぞれの分野の専門家を招き講演をしていただくことで、国語科の教員の方々に学問の最先端の知識にふれる機会をお届けできればと思っています。

日本語教育は生徒のレベル・目的・バックグラウンドがさまざまで、よりどころを見つけるのも難しい場合が多いと聞いています。言総研では、言語学の観点から言語の普遍性や多様性についての講演を行ったり、日本語教育の現場から問題提起をさせていただいたりすることによって、日本語教師のみならずの情報交換の場を提供したいと考えています。

言総研は、平成15年4月に発足し、目に見える社会貢献の一環として、言語運用に関連したプロジェクトを企画実行してまいりました。おかげさまで今年度で20周年を迎えることができました。今後もさまざまな研究を進めていくとともに、ことばに関わる多くの人々をサポートするための活動を続けていきたいと思っています。当センターにご理解・ご支援のほど、どうぞよろしくお願い申し上げます。



九州大学副学長  
大学院人文科学研究院長

上山 あゆみ

## コロナ禍を経て

言語運用総合研究センター設立20周年、誠におめでとうございます。

また、平素より、貴センターの言語聴覚士セミナーの開催等、言語聴覚士(ST)に対する多大なるご支援、ご尽力を賜り、厚くお礼申し上げます。

私たち福岡県言語聴覚士会では、会員のために何ができるかを考え、コロナ禍においてはオンライン研修会やオンデマンド配信等、研鑽の場を設けてきました。コロナが5類に移行し数カ月。コミュニケーションを豊かにする役割をもつ、STの専門性を生かすため、対面での活動再開を模索し、4年ぶりに『言語聴覚の日』のイベントを対面で行ないました。時間を短縮し、感染対策を行いながらでしたが、来場者は体験、相談ブース合わせて163名と盛況のうちに終えることができました。「相談はないかな」と言われながらも、STと話すことで生活の困りごとが明らかになった方、コロナ禍を経て「外に出て、人と話すことが億劫。でも今日は来てよかった」と笑顔で帰られた方、「子どものことで少し気になって…」と相談に来られた方々。

気づかれていないニーズを明らかにする、対話の楽しさを再認識してもらい、困った時に相談できる相手がいることを知っていただく等、改めて市民の皆様へ言語聴覚士を知っていただくよい機会となり、やはり実際にお会いできたからこそ、これらが実現できたと感じています。

また、同志として働くものが集まり、活動できたことは、コロナ禍でオンラインの便利さを享受しつつ、なにか物足りなさを感じていた、我々STにとっても、大きな出来事だったと思います。

成人分野に比べて、小児分野で働くSTは全国的にも少なく、県内でも同様の状況があります。貴センターの言語聴覚士セミナーは小児分野を中心に知識・知見を広め、深める大変有意義な時間となり、小児分野で働く多くの県内STが聴講しています。ST同士「顔が見える」関係を作ること、患者様と対面し、肌で感じたことも踏まえ、何が必要で、何ができるかを考えるために、今後も自己研鑽に努めてまいりたいと思います。



一般社団法人 福岡県言語聴覚士会  
副会長

松井 麻実子



# 大学は門である

学術と新しい知見への道を大学は開く。それだけではなく、日本人の大多数は大学卒業後に就職するため、彼らにとって大学は大人の人生へと入ってゆく門でもある。ひたすら「勉強」だけをしてきた高校時代を終えて、大学に入った今やようやく、彼ら学生は「研究」に取り組むなかで若者として自らを試すことができる。それゆえ、幾人かにとって大学は青年へと足を踏み入れる門である。

しかし、大学という門の後ろにまっすぐな道というものはない。目の前に現れる道だけが唯一の道でも決してない。確かに、アカデミアの大きな観音扉を前にすると、その後ろにはやはり広々とした並木道が開けているのではないか、ゴールにのみ続く一筋の道が開けているのではないかと思われる。

しかし、実際はそうではない。一度その門を潜り抜けてみて初めて、たくさんの道が開けていることがわかるのである。日差しの良い並木道もあれば人通りの多い街道もあるし、曲がり角が多くて狭い路地やほとんど使われていない小道もある。

どの道を選ぶかは自分自身が決めることだ——いずれにしても部分的には。私たちにとっていくつかの出来事は決められているが、それらのほとんどが自分の選んだ道に沿って存在している。道には分岐や交差点、橋に窪み、ほとんど乗り越えることのできない障害もある。人生のあるタイミングで道を選んだのだからと言って、その道を最後まで行くことができるという訳ではない。また——これは良いことなのだが——その道を最後まで行かなければならないという訳でもない。私たちは道を曲がったり外れたり、回り道してみたり、あるいは近道をしったり、それどころか——たまには——道を戻ってみたりできるのだ。

もし、研究を始めたばかりの頃に誰かが私に「君はいつか日本で生活するようになる」と言ったなら、その知らせを伝えに来た人のことを躊躇なしにどこかおかしい奴だと断言したことだろう。当時、私が歩いていた曲がりくねった小道には果てなく霧が広がっていた。自ら選んだ道が私をここに連れてきたのかと思うと、今でもなお只々驚くばかりだ。私にとって大学は、とりわけ九州大学は日本への門であった。そして、小黒教授は助言者であり、道案内人だった。当時は日本に来たというのになお、私が日本にいるのは客人としてでしかないと思っていた。しかし、日本に来て十年以上経った今、生まれ故郷であるドイツを旅すると、私はむしろドイツに客人として来ているように感じる。しかし、私はこの経験から学んだことがある。一見したところ非常に重大な意味を持つような出来事が驚くほど僅かな影響しか与えないことがあるのと丁度おなじように、全く些細で意味のないように見える出来事が私たちの実存における変化に大きな影響を与えることもあるということだ。私の場合、一つの希望と対話がすべてを変えたのだった。

もちろん、私が目の前に続く道を立ち往生したままじっと見つめたままでも、あるいは何が何でも、必要であれば無理にでも自ら選んだ道を最後まで歩んで行ったとしても、何も変わらな



福岡大学人文学部ドイツ語学科  
准教授

アンドレ・ライヒャルト

André Reichart

かっただろう。私は、その道に留まろうと踏ん張らなければならない時間や諦めてはならない時間はないのだ、と言いたいのではない。ただ、私が言いたいのは、大胆な冒険者になるべき瞬間もあるということだ。私たちが見知っていると思っている世界よりも別の、もっとワクワクする世界が開けているかもしれないのだから。

ドイツ語にはおなじみおなじみ綴りで性だけが違う二つの言葉がある。すなわち、「愚か者」der Torと「門」das Torだ。ある人が誰かのことを「愚か者」と呼んだなら、それはその人が愚かだとかうぶだとか、未熟だとか教養がないだとかという意味になるだろう。タロットにも「愚か者」あるいは「愚者」と呼ばれるカードがある。タロットのどんなカードでもそうであるように、このカードにもネガティブな意味とポジティブな意味の両方がある。「愚か者」のカードはその屈託のなさ、率直さ、そして気楽さゆえにポジティブな意味を持っている。「愚か者」は成長の出発点に立っているのであり、その「愚か者=門」としての性質なくして成長は不可能だろう。もし、彼が——これが決定的なことなのだが——学ぼうと志すのであればしかし、彼は成長することだろう。私たちはみな「愚か者」として旅を始めるのであり、旅を乗り越えてのみ変わってゆくのだ。

メールヒェンから哲学的小説に至るまで、ドイツ文学には何かを学ぶために出発する登場人物が沢山いる。自己形成は概して私たちが依って立つ足場を持ち、様々な決断を下す前提となるものだ。人文科学が存在するのはとりわけ、経験や学習から得たこうした知を保持し、こうした知をアクセシブルなものにするためである。今日に至るまで、ドイツの旅人が「ワルツ」と呼ばれる旅に出るのは、経験を積んで人間的に自己形成をするためだと言われる。

私は君にこう助言したい。遍歴せよ!様々な意見に耳を傾け、新しい知見や情報を求めよ。自分自身で新しい知識を生み出すという精神のなかの遍歴だけではない。またインターネットという魔法の如き世界のデジタルなトンネルを飛び抜けるようなバーチャル上の遍歴だけではない。つまり、自らの手足を動かして遍歴せよ。おそらく、私たちのみんながみんな遍歴するために生まれた訳ではないだろうが、試してみる前にそうだとわかることもないだろう。君が進む道を吟味せよ。どんな道にもほかの選択肢がない訳ではない。自らが始めに考え、計画していたことがいつも正しいものとは限らない。横道に踏み出す勇気を持って。アカデミアにいる今より良い時はないだろう。(訳:長光 卓)

ライヒャルト先生の原文の原稿は、  
言総研のホームページからご覧いただけます。





# 日本の学校文化の伝達と理解

～外国人保護者とのコミュニケーションを探る～

同じ人でも、異なる言語で話す際には表情、声のトーン、そして雰囲気が変わるものです。自分が初めてその変化に気付いたとき、私は第二言語習得に対してますます興味を抱くようになりました。言語を学ぶことで、その国の文化からどのような影響を受け、またアイデンティティはどのように変容していくのでしょうか。私は教育者であり研究者であると同時に、2児の母という別の役割も担っています。自らが外国人でありながら、子どもたちが日本で生まれ、日本で育つという状況。このアイデンティティの形成と影響についての疑問は、学問的な視点だけでなく、実践的な問題としても非常に重要だと思います。それはまさに、研究・教育・生活のオーバーラップです。

『外国人保護者とのコミュニケーション：学校プリントから考える』という研究は、このような背景から生まれました。本書では、まず「外国人保護者の視点」から日本の学校文化の特徴や学校プリントの読解ストラテジーを読者と共有し、「学校カルチャー語彙」を抽出して分析しました。これらは日本人にとっては「当たり前」のことも、外国人には理解しづらい「暗黙のルール」で



九州大学共創学部  
准教授

李 曉燕

Li Xiaoyan

あることが多くあります。そのため、外国人保護者と地域の方々とのコミュニケーションや絆、ギャップについてエピソードを通じて描き、また、PTAに関する改善点や保護者の役割とビジネス連携の可能性、双方向のコミュニケーションツールについても提案しています。

次に、「教育現場の視点」からは、外国人保護者との付き合いを通じて得られた知見や、外国人に学校のことを伝えるコツ、外国人保護者と児童を支援するための地域・学校との連携のあり方について述べています。学校プリントの伝統的価値や今後の役割について論じ、未来志向の学校教育の課題を指摘し、帰国子女の活用が有用であると主張しています。

最後に、「日本語教育の研究者の視点」からは、日本語の書記法の難しさを分析し、学校プリントの文章を解析して「学校プリントの隠された傾向」を明らかにしています。異なる言語を共有する経験を通じて、言語への新たな視点を提案しました。

この本は学校プリントに焦点を当て、学校関係者と外国人保護者との円滑なコミュニケーションの方法について提案しています。外国にルーツを持つ子どもや保護者と接するすべての方にとって必要なガイドブックであり、学校側と外国人保護者とのコミュニケーション方法や学校プリントそのものの表現法について解説しています。本書は学校や行政が外国人保護者とコミュニケーションを取るためのガイドブックとして、日本在住の外国人の方々が日本の学校文化を知るきっかけとして、地域日本語教室の教材として、国際交流に興味を持っている方々の手掛かりとして、そして教職課程の参考書としても活用できます。執筆者として、多くの方々に役立つことを願っています。





# これまでのイベント 2003 — 2023

## 社会連携特別企画

日付	企画名	講師・題目
2023年 3月11日	言総研 言語聴覚士セミナー	河野 俊寛「小児の書字障害の理解・評価・支援」
2023年 3月 4日	言総研 日本語教師セミナー	伊藤 秀明「日本語学習環境とレジリエンス」
2023年 2月24日	言総研 国語セミナー 「チンプンカンプンを楽しもう」	(1)藤井 倫明「[意味]か[意図]か—中国思想に流れる2つの言語観」 (2)静永 健「[剽窃]か[オマージュ]か—『唐詩選国字解』の諸問題」

## 社会連携ワークショップ

日付	テーマ	特別講演
2022年 3月12日	「ことば」を考える	大原 重洋「障害のある子どものナラティブの発達と支援」
2022年 3月 5日	「ことば」を考える	山田 智久「教育現場の変化を考える～これからのことばの教師に必要なこと～」 (1)峯松 信明「OJAD(Online Japanese Accent Dictionary)とそれを生いた音声指導」 (2)峯松 信明・西村 多寿子「音声情報処理技術を用いた言語学」
2021年 3月14日	「ことば」を考える	入山 満恵子「学習言語の評価と指導」
2021年 2月28日	「ことば」を考える	井口 千雪「関羽の「義」と曹操の「奸」—『三国志演義』を読む—」
2020年 2月21日	「ことば」を考える	小淵 千絵「聞こえているのに聞き取れない 聴覚情報処理障害(APD)の考え方と支援」
2020年 2月24日	「ことば」を考える	辛島 正雄「平安文学読解の愉悅 —『成尋阿闍梨母日記』『御津の浜松』など—」
2019年 2月22日	「ことば」を考える	西岡 有香「学齢期の読み書き障害の評価と指導」
2019年 2月24日	「ことば」を考える	山田 智久「これからの日本語教師に求められること～テクノロジーと教師の未来～」
2019年 3月 9日	「ことば」を考える	中川 信子「子どもの発達支援とSTの役割」
2018年 2月10日	「ことば」を考える	高山 倫明「古代地名と音訳漢字 —韻尾な世界への誘い—」
2018年 2月23日	「ことば」を考える	高山 倫明「古語は辺境に残る?」
2018年 3月10日	「ことば」を考える	松見 法男「[こころ]から観る[ことば]の学習 —心理学の知見に基づく母語・第二言語教育への示唆—」
2017年 2月12日	「ことば」を考える	横溝 紳一郎「日本語教師のためのアクティブ・ラーニング」
2017年 2月17日	「ことば」を考える	ダグラスB.ペターセン・田中 裕美子 「ワイオミング大学ペターセン先生を招いて:近年における子どもの評価・指導法について」
2017年 3月 4日	「ことば」を考える	青木 博史「歴史語用論入門 —なぜ「言葉は変化する」のか—」
2016年 3月 6日	「ことば」を考える	吉川 達「日本語学習者の日本語を評価すること —実践と課題—」
2016年3月5日,6日	「ことば」を考える	上山 あゆみ「コソ・アに見ることばの意味と役割」
2016年 2月19日	「ことば」を考える	乾 敏郎「言語・非言語コミュニケーション機能の脳内基盤」
2015年 3月 8日	「ことば」を考える	川平 敏文「方丈記は随筆か?」
2015年 2月20日	「ことば」を考える	リサ・メン、田中 裕美子「言語の問題への心理言語学的アプローチ —近年の研究知見から—」
2014年10月26日	「ことば」を考える	畑佐 由紀子「コミュニケーションと形式を重視した指導とは? —SLA研究からわかること—」
2014年 3月 2日	「ことば」を考える	田中 裕美子「言語の問題を考える:話していれば問題がないのか?」
2014年3月1日,2日	「ことば」を考える	久保 智之「文法とアクセント」/ 静永 健「ウマもオドロク漢字の話」
2014年 2月26日	「ことば」を考える	小山 悟「学習者は日本語をどう学んでいるのか —第二言語習得研究入門—」
2013年 3月 3日	「ことば」を考える	久保 智之「言語学入門セミナー:アクセントについて」
2013年 3月 3日	社会連携クロスオーバー企画 日本語教師×言語聴覚士 合同セミナー	久保田 功「こどものことばとコミュニケーションを知る、育てる、関わりあう」
2013年3月2日,3日	「ことば」を考える	下地 理則「琉球列島のことば、人、世界観」/ 中野 三敏「和本リテラシーの回復を」
2013年 2月22日	「ことば」を考える	菊池 良和「エビデンスに基づく吃音支援を考える」
2012年3月3日,4日	「ことば」を考える	

## 社会連携ワークショップ

日付	テーマ	特別講演
2012年 2月24日	文法っておもしろい! —漢文編・古文編—パート2	静永 健「漢皇色を重んじて… —呼び名の不思議—」 青木 博史「古典語の述語形式について」
2011年3月19日,20日	「ことば」を考える	宇野 彰「読み書きの難しい子どもたちの理解と支援を考える」
2011年 3月 4日	「ことば」を考える	(社会連携ワークショップ・プレイベント) 高山 倫明「紫式部の発音を探る!」

## 特別講演会

日付	講師	題目
2010年 2月 7日	宇野 彰	読み書きが難しい子どもたちの理解から支援へ
2009年 3月15日	今泉 敏	発話意図理解とその障害
2008年 2月11日	伊集院 睦雄	『読み』の仕組みとその障害について
2007年 2月 4日	氏平 明	吃音の言語学的・音声学的分析
2006年 9月 2日	藤田 郁代	失語症における構文機能の障害—認知神経心理学的アプローチ
2006年 3月11日	市田 泰弘	言語としての『手話』・文化としての『ろう』
2006年 2月11日	大津 由紀雄/今西 典子 磯部 美和/岩田 誠	こころの発達—言語獲得と言語障害

## 特別セミナー

日付	講師	題目
2010年 2月19日	静永 健/青木 博史	文法っておもしろい! —漢文編・古文編—
2009年 2月20日	静永 健/高山 倫明	漢字っておもしろい!
2008年 2月20日	上山 あゆみ/高山 倫明	文法って面白いの? —自分のことばにも発見!がある—

## 言語障害特別セミナー

日付	講師	題目
2004年11月 3日	上田 功	(1)機能性構音障害と音韻論 (2)機能性構音障害の音韻分析
2004年10月10日	萩原 裕子	(1)言語学と失語症研究 (2)文処理の脳内メカニズム
2004年 9月26日	酒井 弘	(1)ことばを育む脳の働きを探る (2)動詞形態処理の脳機能
2004年 7月11日	神尾 陽子	自閉症スペクトラムの言語・コミュニケーション研究
2004年 2月22日	久保 智之	プロソディーについて(言語学入門講座)

## 言語療法スキルアップ連続セミナー

日付	講師	題目
2004年 6月 6日	佐々木 洋	口腔機能の発達とこころの成育支援
2004年 3月 7日	佐々木 洋	口腔機能の発達とこころの成育支援
2004年1月11,12日	佐々木 洋	口腔機能の発達とこころの成育支援
2003年12月14日	舘村 卓	鼻咽腔閉鎖機能の評価と治療
2003年 9月14日	熊倉 勇美	口腔腫瘍の構音障害

## その他の企画

日付	講師	題目
2010年 7月21日	静永 健	親子でたのしく「にんぷろ・かるた」 ～九大で学ぼう!日本の歴史☆アジアの歴史～ (日本学術振興会助成特別企画 ひらめき☆ときめきサイエンス ～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI)

# 日本語教育における 自律学習支援の理論と実践

講師 **義永 美央子**先生  
(大阪大学教授)

日時・会場

2024年3月2日(土)  
13:30-15:30

Zoomによるオンライン開催

(定員300名。入室用リンクは開催2日前までにメールでお送りします)

参加  
無料

概要

近年、学習者の主体的・自律的な学びを支援する方法について注目が集まっています。このセミナーではまず、学習者と教師の自律(オートノミー)を中心に、「自律」をめぐる議論や理論的背景について検討し、単に「一人で学ぶ」のではなく、「責任を持った選択や決定をする力」や「協働する力」、そして「適切に主張する力」を育むことの重要性を説明します。また、自律学習支援の具体的な実践例を紹介し、互恵的な関係性に基づいた自律的・主体的な学びを創造する方法について考えたいと思います。

お申込み

- 日本語教師に限らず、興味のある方はどなたでも参加いただけます
- 2024年2月25日(日)までに、右のQRコードより登録を行ってください
- QRコードが読み取れない際は、当センターのHPからお申し込みください

URL : <https://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/~cslp/>



お問い合わせ先

九州大学大学院人文科学研究院附属言語運用総合研究センター (cslpstuff@gmail.com)

主催：九州大学文学部・社会連携推進委員会  
運営：九州大学大学院人文科学研究院附属言語運用総合研究センター  
後援：九州日本語教育連絡協議会(九日連)

# 早口言語症(クラタリング)の 理解と支援

講師 **宮本 昌子**先生  
(筑波大学教授)

日時・会場

2024年3月9日(土)  
14:00-16:00

Zoomによるオンライン開催

(定員300名。入室用リンクは開催2日前までにメールでお送りします)

参加  
無料

概要

早口言語症(クラタリング)は、吃音とよく似ているが異なる流暢性障害です。速い速度で話すこと、あるいは発話速度が不規則であることが中核症状です。この症状に加え、非流暢性や不明瞭性が生じます。症例によっては吃音の中に紛れ、鑑別が困難な場合もあります。今回は、吃音との相違点に注意しながら早口言語症の症例を正確に評価するための方法について概説し、モニタリングに着目した支援法についても紹介します。

お申込み

- 言語聴覚士に限らず、興味のある方はどなたでも参加いただけます
- 2024年3月3日(日)までに、右のQRコードより登録を行ってください
- QRコードが読み取れない際は、当センターのHPからお申し込みください

URL : <https://www2.lit.kyushu-u.ac.jp/~cslp/>



お問い合わせ先

九州大学大学院人文科学研究院附属言語運用総合研究センター (cslpstuff@gmail.com)

主催：九州大学文学部・社会連携推進委員会  
運営：九州大学大学院人文科学研究院附属言語運用総合研究センター  
後援：一般社団法人福岡県言語聴覚士会・麻生リハビリテーション大学校・福岡国際医療福祉大学・柳川リハビリテーション学院